



No. 29

1990年 3月発行

新潟県支部報

私のフィールド

魅力ある高田平野北部

古川 弘

高田平野北部へ鳥を見に行くようになってから、かれこれ20年位になりましょうか。1970年当時、まだ新潟県支部がなかったので長野支部に入っていて、愛知県の鍋田干拓地のシギチドリ探鳥行に参加し、広い水田で鳥を探しまわって見て来ました。それで、この高田平野北部にも探せばきっといる筈だと思い、また地元にいる（来る）鳥をよく見ようと考え、以来休日と仕事の帰りや合間に、池や田んぼや川原などを回り始めたわけです。暫くは平野の南部も回っていましたが、いろんな鳥がどうも北部の方に多く見られるので、だんだん北部の方に多く足が向くようになりました。

高田平野北部は、頸北平地帯と言われ、多くの池があって水田が広がり、海も近いせいか、ガンカモ類・シギチドリ類・ワシタカ類その他さまざまな鳥がいるので魅力があります。これまで上越地方で記録されていなかった多くの鳥と出会うことができました。特に珍鳥を初めて出合った時の様子など、いつまでも忘れられません。中でも'84.12.9にタンチョウを見つけた時は自分の目を疑いましたね。まさかタンチョウが高田平野に現れると思ってませんでしたので。わずか1日ただけでそのタンチョウは去ってゆきましたが、印象深い鳥でした。

春・秋の頃、広い田んぼ1枚1枚、あぜ1本1本じっくり探してゆくと何かしらいます。そして珍客に出会えるかと思うと、費やす時間のことなど忘れてしまいます。クロハラアジサシ、オオチドリ、ヒメコウテンシ、マジロツメナガセキレイなどこうして見つけたのです。また低気圧の通る前後など時として珍客が現われます。仕事に支障がない限り、また少し位雨が降っていても現地に向います。シマアオジ、キマユホオジロ、セイタカシギなどそんな時に会いました。

かつては海岸にもよく行きましたが、このところあちこち工作物ができたり、釣人が増えたりしてシギチドリもあまり寄りつかなくなってきたので最近あまり回っていません。しかし直江津港には海鳥類はじめシギチドリ類その他さまざまの鳥が来るので、よく行きます。ここでも幾つかの珍客に出会いました。

これからも、まだお目にかかっていない鳥に出会うことを楽しみに、この地帯の探鳥を気長に続けてゆこうと思っています。（談）



（高田付近）

本県初記録

オオカラモズの飛来

古川 弘・常山 秀夫・山本 明

飛来地：中頸城郡頸城村浮鳥地区の水田

飛来数：成鳥1羽（♀♂不明）

初認（発見）：'89年2月6日（古川）

終 認：同2月28日（古川）

飛来地の環境：図と写真に示すように、近くに集落がある他は広い水田地帯で、用水の小川の畔に、ところどころハンノキとサトネリコが一行に生えていて、また川辺の附近のあちこちに、アシ原がある。

習性と行動：とまっていたのは主として西側（写真左側）のサトネリコの列であるが、少し離れた東側（写真右側）の少し大きいハンノキの列にもとまり、これらの木はどれこれなく全部をとまり木に利用していた。またすぐ近くにある鉄塔の下の方にもよくとまっていたし、南の方少し離れた所に竹が立てられていて、その先に出ている針金にもよくとまっていた。更に浮鳥集落のはずれにある農業用ハウスの屋根にもとまることがあった。普通のモズより二まわりも大きい、尾を上下に振るところはやはりモズ科の鳥である。

木や竹の先にとまっていて、地上（水田や小川の土手）の獲物を探し、見つけると一直線に飛んで行って、口にくわえてきてまた木に止る。同じ木にとまるとは限らない。餌はよくわからないが、ミミズのようなものやケラらしきものが見られた。また脚や口に泥がついていたこともあるので、泥の中に入って中にいる生き物を獲って食うこともあると推定される。

普通のモズもその近くをなわばりとしていて、時々オオカラモズの近くに現れることがあったが、オオカラモズは特別反応しなかった。従って争うこともなかった。しかし、そ

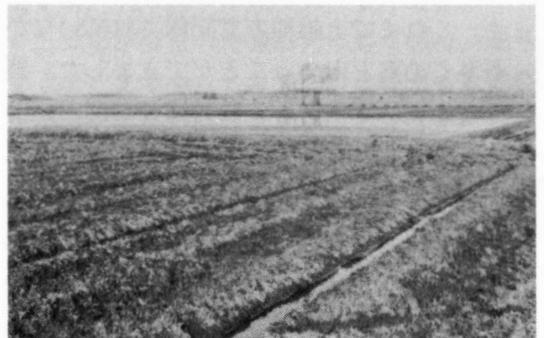
の付近になわばりをもつチョウゲンボウが、時々木にとまっているオオカラモズめがけて突込んでくることがあり、その時キュルキュルキュル、リリリ、リーと鳴いたことがあった。鳴き声を聞いたのはこの時一回だけだった。またホバリングも1回だけ観察した。

図に示すように、主としてハンノキのある所にいたが、時々または人が近づいたりすると、600m離れた北東の用水の小川沿いにある小屋付近へ飛んでゆき、また1000m離れた北西の瀧川沿いにあるハンノキ列（その付近もアシ原あり）の方へ、直接または小屋の方から飛んでゆき、どうやらこの3点を囲む範囲をなわばりとしているようであった。そして、小川やアシ原は採餌と関係があるように思われた。

3月1日に春一番の南風が吹いた時以来、このオオカラモズの姿は見られなくなった。

主な生息地と日本におけるこれまでの記録：

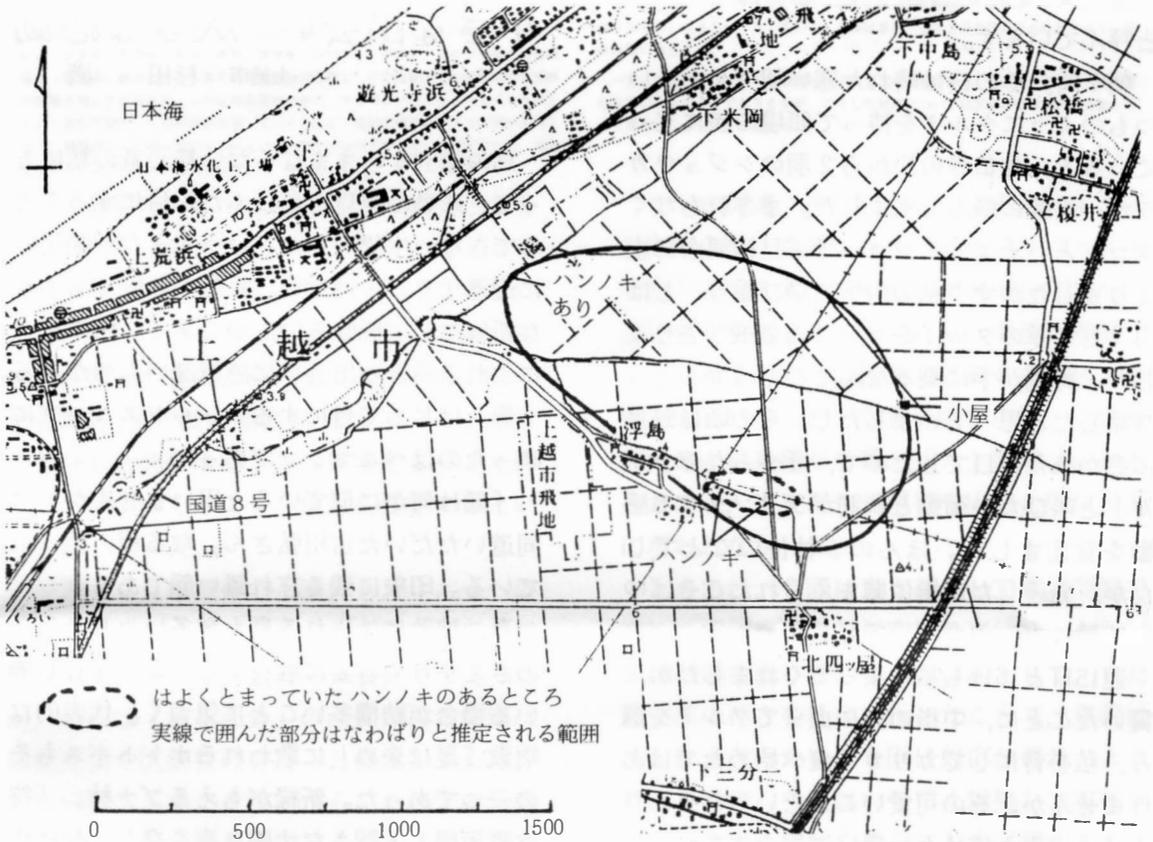
オオカラモズは、「フィールドガイド日本の野鳥」の分布図で見られる通り、中国東北部と北部奥地、モンゴル国などが繁殖地で、越冬地はそれより南の朝鮮半島、中国北・中・南の平野部などであるから、名の通り中国



飛来地の環境



オオカラモズ二態



飛来地周辺図(国土地理院1/25000地図より)

の鳥である。

日本ではこれまで十数回記録されているが、石川・鳥取・兵庫・岡山・高知・佐賀・熊本・宮崎の各県、島では舢倉島と対島など、い

ずれも西日本である。今回迷行とは言え、本県南部に飛来し、1ヶ月近く滞留したことは、暖冬のため殆んど雪がなかったという気象のためと思われる。(文責一山本)

◇特集◇◇鳥——あの感動のとき◇

シジュウカラが掌に乗った!!

新潟市 岡田 正衛

“ジロー手に乗る” 63年1月14日付の私のフィールドノートにこう書かれています。

ジローとは、雄のシジュウカラのことで、私の付けた呼び名です。バードウォッチングを始めた62年4月から、我が家の餌場に来る常連の1羽です。胸のネクタイが若干細目でスマートな姿が目印です。番の雌をハナコと呼んでいます。

朝7時、その日は晴れた寒い朝でした。いつものようにクルミを持って餌場の傍に立っていると、念仏寺の松から2羽のシジュウカラが一直線に飛んで来ました。まぎれもなくジローとハナコで、ジローは一旦給餌台に止まりましたがすぐ私の中指に飛び乗り、しばらくして掌のクルミをついばんで飛び去りました。野鳥が手に乗るなんてことは夢のような話だと思っていましたし、その頃は野鳥に憑かれた毎日でしたので、「やったぞウー!!」と叫びたい衝動と背筋がゾクゾクする感動を覚えました。ほんの5秒位のことでしたが、発達した足指に掴まえられたこそばゆい感触は一生消えないでしょう。

翌15日と16日も掌に乗ってくれましたが、驚いたことに、中指の先に止ってクルミを掴み、私を背にしてカリカリ食べ始めたではありませんか。その可愛いことといたらありません。抱き締めたい思いで尾の先をソーッと親指で押しても動じませんでした。今年の冬も4回掌に乗って餌を食べましたし、春にはこれまた嬉しいことに、巣立ち雛を連れて部屋にまで入るようになりました。

考えて見ますと、一昨年の冬場は、^{ミソレ}翼の日も吹雪の日も欠かすことなく餌場に立ち続け

たものです。勿論野生ですから、人に馴れるということはありませんが、少なくとも、裏切ることなく誠意をもって接すれば何か通じ合うものだ…と、感動の余韻を味わっています。

今のところ、まだ給餌の場だけで自己満足の域を脱しません、今年からミニサンクチュアリづくりを始めたいと思っています。

それにしても、「窓をあければキミがいる」そのものズバリの生活は、私の生がいです。

小さな出会い 大きな感動

上越市 杉田 満

鳥の識別すらままならない初心者の私にとって、珍鳥の発見とか、ふだん目にするのでできない生態を見たという大きな感動場面に遭遇することはない。見るもの聞くものみな新鮮にして感動そのものである。四季折々にふれる鳥との出会いに感慨深いものがある。

春。はじめて目にするフィールドスコープに映ったのはベニマシコであった。

「顔は何かに似ていると思いませんか」同道いただいた古川弘さん。なる程、猿に似ている。印象に残る忘れ難い顔である。

夏。詩歌に詠まれる鳥も数多い。しかしそのさえずりや容姿に触れずして歌いすごしている場合が結構多いことに気づく。代表的な唱歌「夏は来ぬ」に歌われるホトトギスもその一つであった。新緑がもえるブナ林。「特許許可局」と聞きなす鳴き声を発し、枝に止まる姿をはじめて目にしたとき、数多くの夏鳥から選ばれた幸運の鳥はこれかとおつづく見入ったものだ。

シギ・チドリ類の探鳥に同行の折、片足のタカブシギに出会う。環境悪化の犠牲と聞く。それでも一心に餌をついばむ姿に偉大な生命

力が感じられた。「飛ぶ鳥あとをにごさず」人間に与えた大きな警告である。

秋。配色の美しいアカゲラ。頑丈な足の爪、硬い尾羽で体を支え、幹に垂直に止まり、幹をたたく音はドラムをたたくように秋空にリズムカルに響く。落葉のころは虫も少ない時期でもあるのか夏場より心なしか強く聞こえる。木々の枯葉もつられて落ち行く様は秋の風物詩といってもよい。



冬。「オシドリ夫婦」という慣用句がある。物を見ずして語るなかれとばかり出かける。雌雄相思の姿を無言でながめつつ、殺伐とした世相に思いをめぐらす。

鳥それぞれに個性があり、しぐさに心が引かれるこの頃。鳥との小さな出会いを通して人も及ばない生活の知恵、生きるたくましさや自然に学ぶことが大きな感動につながるものと思う。

ヒルバ，達者でな

小出町 柳瀬 昭彦

野生の鳥に名前をつける、ということは個体識別が出来て、しかも長期にわたり観察できるということである。わたしが名前をつけたただ一羽の野鳥を紹介しよう。

その名は、ヒルバ、老いた？トビである。ヒルバに初めて出合ったのは、1982年の8月29日、人波が去った静かな尾瀬を歩こうと、奥只見ダムを船で渡り、尾瀬口の船付場で沼山峠行のバスを待っていた時である。上空を舞う二羽のトビのうち、一羽に、あれ尾羽がないぞ。それでいて信じがたい巧みな旋回をするのではないか。でも、きっと冬を越せない老鳥だな、とその時は思った。

翌1983年の10月、紅葉の尾瀬を訪ねて再び尾瀬口に立った時、なんとあの尾のないトビが湖岸の枯木から飛び立ったではないか。やあやあ、生きたんか。思わず、その声をかけてしまった。それから注意していると毎年このトビに出会う。その出会いを喜ぶうちに、わたしはこのトビにヒルバと名をつけることにした。その船付場のあたりは、昔ここに住んでいた人々が山

仕事の合事に休んだり、昼飯を食べたりしたところから「昼場」と呼ばれるようになり、今はその名残りにヒルバ・ハウスという民宿が建っている。そこのぬしだからヒルバ。

ヒルバは尾羽の再生機能を失ったのか、もともと尾羽は生えかわらぬものなのか、浅学にして知らないが、とにかく1989年の8月末にも、その尾羽なしで元気に舞う姿を見て、ほっとしたのだが、さて、この厳しい冬をどこでどうして暮らしていることやら、気もめめることである。

地人書館の図解動物観察事典によれば、トビの寿命は25年とある。サギやクジャクも25年、スズメは40年も生きると書いてあるが、わたしは、その切りがよすぎる数字を不審に思う。ヒルバとともにわたしも長生きをして、21世紀に25歳を過ぎてなお元気な彼(彼女?)の姿を見続けたいと願っている。

野鳥の会員の皆さんも、あそこを通ったら空を見あげて、ヒルバよ、達者でな、と声を掛けて欲しい。

まだ見ぬ闖入者たちへ

——早出川は招く——

五泉市 宮崎 増次

コアジサシが7番。コチドリとイソシギたち。中州の小さなコロニーに、その鳥が現われたのは7月6日であった。コアジサシのヒナがヨチヨチ歩きを始めたばかりの巣の近くに突然その鳥は舞い降りた。

茶褐色の背中に嘴の根元が赤い。胸元が白く、その周辺が黒く太い線で囲まれ、白い腹をしていた。一見ツバメを大きくしたようで、飛び方はイカルチドリのようにでもあり、よく鳴く。地上ではヨタカのようにペタリすりわりこんでジッとしている。——と、その時の観察ノートは記していた。名前は判別できないままに……。

阿賀野川の支流「早出川」は、中蒲村松町の川内山山系を源に五泉市で阿賀に合流する。ブナ、カツラの天然林で近年注目された菅名岳も、その上流に接する。早出川の由来は、文字通り「水の出が早い」からといわれる。それだけに中流域で中州がよく発達していて、水も比較的きれいだ。

数年前からこの川の鳥に注意をはらってきたが、代表的なものはコアジサシ、コチドリ、イカルチドリ、イソシギ、オオヨシキリにキジなどである。

なかでもハデにダイビングをくり返すコアジサシの姿が清流によくはえる。毎年10番前後が営巣し、夏休みの河原遊びの時期になると旅立ってゆく。

今年は7番で、14羽ふ化したが、無事旅立ったのは7羽のようであった。あとはツミの襲撃など、外敵にやられたようだ。それでも7月10日の増水で、ほとんど全滅した昨年よりはましであった。

このコロニーの自然状態が10年20年前と比べて、良いのか悪いのか知る由もないが、コ

サギが河原に入りこむ現状では、あまり感心できない。これ以上悪化するなら、方策を講じなければなるまい。

そんなとき、カワセミやタカブシギ、クサシギの訪問をうけると心が洗われる。前述した見知らぬその鳥の、たった1日の闖入も、一時コアジサシさえ忘れさせる。

後日それがツバメチドリであることを知り、しかも新潟の常山氏から、めずらしい繁殖羽であるとの教示を受け、子供のように喜んでりしている。

そして早出川の自然が、「菅名岳」のそれ以上に優れたものとなり、愛鳥家で埋る日を夢みたり……。来春が待ちどおしい。

野鳥と私

妙高高原町 岸本 茂徳

始めて双眼鏡で野鳥を見たのは、十数年前の多摩川でした。友人の案内で無理やり連れて行かれたことを覚えています。その時私は「キセキレイ」をまず入れて見ますと、何か不思議な感動にひたりました。その日は「カワセミ」や、秋の渡りの頃でしたので、シギ類を見たかと思えます。

私を案内したその友人は、翌年の春に今度は軽井沢に私を誘いました。私は二つ返事をし何か他のことを考えたかもしれません。少し話は逸れますが、その頃私は練馬区の関町に「エマウス」と言う廃品回収を行う身寄のない人たちの共同体で手伝いをしていました。私が軽井沢へ探鳥に行くことを告げると大変羨ましがられました。軽井沢では1つだけ強く印象に残ったのは、「アカハラ」のあの優雅な洗練された「さえずり」です。地域により「さえずり」が少し違っていると聞きますが、私はその「アカハラ」に関しては、妙高と軽井沢の違いを感じてなりません。

また、その友人のことですが、その年の初冬に私を伊豆沼へ駆り立てました。私は寒さ

のため辛うじて目を開け、そこが伊豆沼であることも知ることもなく立っていました。そこには友人の知り合いがおり、海岸や山の方も案内してもらいました。その時1,000ミリぐらいのレンズを積んで車で移動し、時折車から白い筒を出す不審な私たちは、とうとう宮城県警のパトカーの餌食になってしまいました。今になっては楽しい思い出です。

ところで、私の友人のことですが、時あたかもこの原稿を書いています明日、東京で恩師の還暦のお祝いに数年ぶりに会います。帰省し2~3回は会ってはいますが、ゆっくり話をする機回もなく楽しみにしています。

数年前、私が雪おろしのため屋根に上がっていたとき、たしか「オガワコマドリ」の胸元のコバルトブルーに我を忘れたことを話してみようと思います。

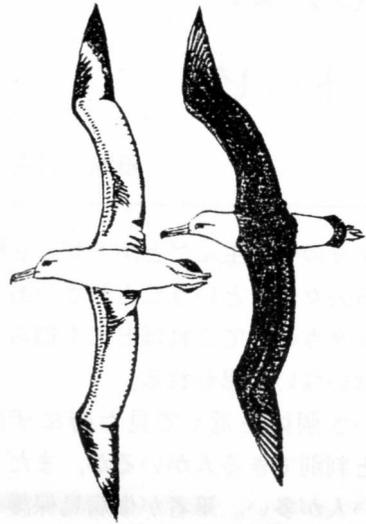
今度は私が友人を誘い妙高を案内できる日を楽しみにしております。

飛ぶ鳥への想い

柏崎市 末崎 朗

私は鳥を見る時には、鳥に飛んでほしくないと長い間思っていました。鳥が飛んでしまえば、その美しい色や姿をじっくりと見る事ができず、鳥を見る面白味がなくなってしまうとずっと思っていました。

何年か前に友人と北海道にフェリーで探鳥旅行に出かけた事がありました。フェリーの上で海鳥を見るのも目的の一つでした。オオミズナギドリやトウゾクカモメを見た後で、見なれない鳥が一羽フェリーの回りを飛び始めました。その鳥は、何十秒見ても一回も羽ばたきません。翼長が体長に比して異様に長く、まるで波の間を縫うように飛ぶその鳥はコアホウドリでした。「ソアリング」、言葉だけは知っていても実際にその飛び方を見たのは初めてでした。風をうまく利用しながら優雅に舞うコアホウドリを見て私は、鳥



「フィールドガイド
日本野鳥」より

というのは空を飛ぶように進化してきた生物であるということであらためて強く感じました。その時から、鳥の飛ぶ姿も関心をもって見るようになりました。そんな目で鳥を見始めると、それぞれの種が固有の美しい飛び方をもつことがあらためて認識できます。なかでも、ガンがきりもみ状態で池におりる姿、トウネンが波打際に群れ飛ぶ姿、サンバが南へ渡っていく姿などは、みなそれぞれに美しく感動的な瞬間として私の胸に焼きつけられています。

昔から鳥は、空を飛ぶことから「自由」のイメージと強く結びつけられてきました。しかし、自然界に生きていく必要から生まれたその飛び方は、それぞれの生き方と密接に結びついており、「自由」のイメージとは程遠く感じられる時もあります。しかし、また「自由」とかけはなれたような、そんな瞬間にも自然の中に溶け込んだ美しさがあると私は思います。飛ぶ瞬間に秘められた感動を求めて、これからも鳥を見ていきたいと思っている今日この頃です。

この特集の写真およびイラストは編集部で挿入した。

猛 類シリーズVI

トビ

風間 辰夫

トビがタカの子を生んだとかトビに油揚げさらわれる云々……ということわざがあるが日本産ワシタカの中でこれほどよく知られているタカはいないと思われる。

しかしいざ個体を近くで見た時にずばり“トビ”と判別できる人がいるか、まだまだ自信がない人が多い。筆者が傷病鳥保護の依頼を受けて(デンワで)オオワシ、オジロワシ、ミサゴ、トビより大きいタカだといわれているが、すべてトビであった。これほど知られているタカであってもこんな程度である。

もう少しトビについて知ってもらいたいのので次に述べ、会員の皆さんの参考に供したい。

・生息地及び生息数

低山帯から平野部そして海岸線に多く生息しており、あまり移動しない種である。

県内で最も多いのが佐渡ヶ島で両津市の海岸線、粟島、糸魚川、柏崎、巻町、岩室、村上、紫雲寺等の海岸線に多く、営巣数も多い。

生息数は、県傷病鳥救護舎で昭和46年から平成元年12月まで収容した数は650羽余であり、傷病鳥として収容した187種のうちでは一番多くなっているのので、この数を10倍にして6,500羽、100倍にして65,000羽となり、生息地等から合理的に判断して県内に生息するトビの数は15,000～20,000羽とみられる。

・食性

最近のトビは生きた鳥獣はあまり食べず、イヌ、ネコ、タヌキ、イタチ、ドバト等のへい死体を食べている。場所によって自動車にひかれるのを待っている個体も多く見られる。

町の掃除屋さんといわれる所以である。

・事故に合う状況

昭和46年から平成元年12月まで187種、

6,500羽余の野生鳥類が保護されたがその10パーセントはトビでトップをしめている。

事故に合う理由は、開発行為による道路が多くなったことで、自動車に衝突又は接触事故が一番多く、次いで特急列車、新幹線、農業、たまに飛行機に接触するという具合で、いづれも人間が作った文明の器によるものである。

・生命力

日本産鳥類の中で一番生命力の強いのがトビであり、獣類ではタヌキである。

とにかく前記650羽の傷病トビのうち死亡したのは8～10パーセントであり、殆んど助かっている。

・人間生活にとって必要な鳥かどうか。

まずトビの熟語を見ると、鳶色(茶色)、鳶口(トビの口ばしに似る)、鳶職、とんび(これはあまりよくない、盗人にたとえられている)等があるが、日本は世界一ともいえる交通量、特に自動車によるペット殺傷事故が多く、これを処理してくれるのはトビやカラスである。更にネズミ、モグラ、ドバト等人間の生活を大きくおびやかしている鳥獣を駆除してくれる役割が極めて高い、それから青空に輪をえがいて上空を旋回している姿は“きれいな空気”の下で生きているような気がしている。そこで一首

トビが舞う、青空高く、天高く、
地球環境、守れ人間。



＜イベント報告＞

盛況！ガンシンポジウム

雁を保護する会・福島潟野鳥の会・野生生物情報センターが主催し、豊栄市および当支部を含む県内の野鳥関係団体の後援で、'89年11月25・26日に豊栄市で開かれた。このシンポジウムが本県内で開催されるのは初めてであるが、25日の当日は予想を大きく上回る100人以上の参加者（県外30人余、県内70人余）で、会場を博物館から向いの東小学校へ移さなければならぬ程の盛況であった。雁を保護する会の招待で来日したソ連科学アカデミー会員のN・ゲラシモフ博士も出席され、国際色を帯びたシンポジウムとなった。ゲラシモフ氏は日ソ共同で標識調査によるガン類の渡りの研究をしているソ連側の代表で、毎夏カムチャッカ半島でヒシクイの標識（記号・番号入りの首環をつける）を行っている。

シンポジウムは開会セレモニーのあと、先ず雁を保護する会事務局長の呉地正行氏より「日本におけるガン類の調査研究および保護活動について」基調報告がなされ、特にヒシクイについて主として日本海側に渡来する亜種オオヒシクイと、主として太平洋側に渡来する亜種ヒシクイの相違などをスライドで説明された。次に特別講演として、ゲラシモフ氏が「カムチャッカ半島におけるガンカモ類の渡りについて」（通訳—帯広畜産大藤巻裕蔵教授）、またヒシクイ標識の状況やカムチャッカ半島の鳥類などをスライドで紹介された。

今回のシンポジウムのテーマは「日本海側におけるオオヒシクイを中心としたガン類の渡来状況および越冬生態」というもので、次の5氏が各渡来地のガンについて報告された。

1. 千葉 晃 — 福島潟におけるオオヒシクイの越冬生態
2. 山本 明 — 朝日池におけるガン類の渡来状況と越冬生態。

3. 近藤健一郎—佐渡島におけるガン類の渡来状況。
4. 坂本周一 — 石川・福井で越冬するオオヒシクイの生態
5. 須川 恒 — 琵琶湖・西湖で越冬するオオヒシクイの生態。

最後に、福島潟が年々水位が低下し、陸地化が進行している中で、洪水防止を目的とする県営の放水路工事とも関連し、今後水鳥類の生息地としての前途が憂慮されることから、「福島潟の環境保全に関するアピールと提言」を本田清氏の趣旨説明の後、参加者全員の賛同で採択され、関係省庁・新潟県知事・県内関係市町村長へ送ることになった。

なお、案内には雁を保護する会の義田義雄会長が「日本におけるシジュウカラガンの羽数回復について」講演することになっていたが、ゲラシモフ氏の講演とスライド映写で長くかかったので、シンポジウムでは割愛され、夜の懇親会の折にその概略が話された。

翌日は晴天にめぐまれ、福島潟と鳥屋野潟で観察会を行った。福島潟では休息しているヒシクイとコハクチョウの群、それにちょうど採餌場から帰ってきたヒシクイの大群に出会うことができた。また潟の陸地化が進んでいる現状も見ることができた。

以上今回のシンポジウムがこれまでになく盛況だったのは、ゲラシモフ博士の出席と共に、博物館を含む豊栄市の全面的な支援と、主催団体に加わった福島潟野鳥の会の献身的な協力に負うところが大きかった。

（なお、このシンポジウムの報告は、主催者に加わっている野生生物情報センターから出ている「ワイルド・ライフレポート」誌に掲載され、その抜刷が冊子となって刊行されることになっている）

上越市のアオサギコロニーの保護について

保護部 山本 明

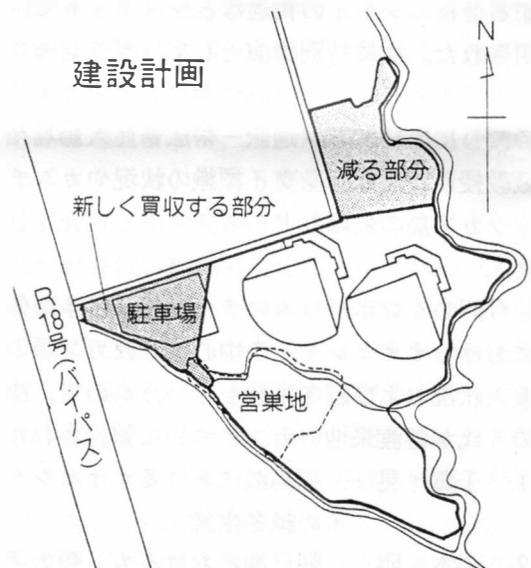
'89年6月の上越市議会で、アオサギのコロニーのある場所に、市が少年野球場の建設を計画しているのは問題である。と論議されていることがマスコミによって報道された。（'89.6.10付各社新聞、以後日報・上越新聞その他で関連報道）このコロニーに注目していた私共野鳥愛好者も全く寝耳に水であった。上越市が“ふるさと創生費”も使って少年野球場を造ることは平成元年度の予算に盛り込まれたが、その建設予定地については、6月市議会で始めて明らかにされたものである。高柳町では“ふるさと創生費”の一部でブナ林を買い上げて、ふるさとの森を創ろうとするのに、上越市はふるさとの自然林それもアオサギのコロニーのある自然林をつぶして少年野球場を造るというのである。しかも市議会で問題が提起されるまで、建設主管の市教育委員会はそこにアオサギのコロニーのあることを知らなかったという。

ところで、このアオサギのコロニーは、北陸自動車道の上越ICから上新バイパスで新井方向に走って間もなくの左手、バイパスの東側300m内外のハンノキの林の中にある。その北側にはスギが植林されている所もある。このコロニーは'88年の春、鳥仲間では古川弘氏が始めて見つけたもので、それ以前にあったかどうか判然としない。近くの田んぼで作業をしている人にきいても、全然知らなかったという人や、ずっと以前にはあったようだが、一時サギの姿が見えなくなり、近頃また戻ってきたようだという人もいた。

ともかく、'88年春からの観察で、'88年は11巣から38羽のヒナが巣立った。翌'89年（昨年）は確認しただけでも、32の巣から85羽のヒナが巣立っている。林外からの観察で、

巣およびヒナの確認が困難な所もあり、実際にはこれ以上のヒナが巣立っているかも知れない。

6月の市議会では、純無所属のI議員が1人で問題を提起し、一般質問でも建設予定地の変更を求めて市長の見解を正したが、市長は変更の意志はないと答弁している。その後市は、議会論議やマスコミの反響などから、建設予定地は変えないものの、人とサギとの共存を図るということで、建設計画を見直し、アオサギのコロニーのあるハンノキ林を残し、2面の球場をコロニーをはずしてつくるという案を発表し報道された。（8月26日付上越新聞他）（図参照）この見直し案に対し、私は地元保護部員として検討し、この案ではアオサギのコロニーへの配慮が不充分であると考へ、長岡でサギの研究を長く続けている長岡科学博物館の渡辺央氏からも意見をきき、別掲のような要望文書を草して、支部長と連絡をとった上で事務局から出していただいた。



（日刊上越新聞 1989.8.26 より）

平成元年9月5日

上越市長 榎木 公 殿

日本野鳥の会 新潟県支部長 大島 吾

アオサギのコロニーの保護について(要望)

日頃から野鳥保護についてのご意見を敬重いたします。

さて、去る6月の上越市議会において、アオサギのコロニーのある御市富岡の大日地区の自然林(一部人工林)が少年野球場の建設予定地であることから、その保護をめぐって論議されたことが報道されました。またこのたびは、サギとの共存を図るため建設計画を見直し、縮小して建設すること、営業期をさけて工事をすることなどが報道されました。

当支部は、地元会員により発見されたこのコロニーに注目し、その観察をまもってまいりました。今年を確認しただけでも27の巣から85羽の雛が巣立っております。上越地方でこれだけまとまったアオサギのコロニーは他になく、県内でも長岡市怒久山蘆葦の森など、数箇所確認されているにすぎません。今は普通に見られるアオサギも、生息地が狭められ環境が悪化してゆけば、やがて減少の一途をたどり、トキやコウノトリのようにならないとも限りません。

6月市議会の報道以来、当支部としてはこの問題に大きな関心を持って参りました。たしかにアオサギは天然記念物でも特殊鳥類でもなく、法的には保護の対象になる鳥ではありません。また大日地区の自然林も法的に規制を受ける保護区や指定地区でもありません。しかしながら、高田平野の水田に囲まれた自然林の中に、アオサギのコロニーがあるという、ふる里の自然環境を大事にしたいと考えております。

因みにこの森は、長年の間に自然の種生が回復し、ハンノキをはじめエノキ・オニグルミ・クヌギ・ケヤキ・ホムノギや、ゴマギ・シロダモ・ワコギ・ツルマサキその他の高木・亜高木・低木と共に、多くの雑草種物が生育し、今では数少ない平野部の自然林の特徴を備えております。しかも林床種物の中に、チョウジソウ(きょうちくとう科)という本県では珍しい草本種が生育していることが、種物の研究家によって確かされており、種物分布上の証も秘めているという、単にアオサギのコロニーだけでなく、種物上からも大事にしたい森であります。

その要旨は、第1には少年野球場を別な所に造ることを望むが、それが無理ならアオサギのコロニーへの影響を最小限少なくするために、球場をコロニーのある所からできるだけ引き離して造る。そのために「新しく購入する部分」を「減る部分」の近くにとって「減る部分」と共に用地とし、球場をもっと北の方へ下げてつくるよう、検討を要望するというものであった。

一方、9月市議会でI議員もコロニーへの影響を少なくするための大体同様な独自の見直し案を出して、本議会で一般質問を行ったが、市長は「減る部分」の西側にある水田は地盤整備や区画整理を行った優良田のため、取得困難であることなどからこれ以上の見直しはしないと答弁している。従って当支部の要望も残念ながら取り上げられるに至らなかった。

この問題ではマスコミなど好意的に報道し、市側の不手際を論評した新聞もあって、大分注目はされたが、しかしまだまだ保護を望む側の力は弱い。予定地周辺の住民・農家は、

以上の理由から、当支部として第一には少年野球場の建設予定地を他の場所に移すよう要望するところであります。このことは当面のコロニーの保護という直接面ばかりでなく、コロニーの近くに公共施設を造ると、長岡市の寒久山の例に見られるように、早稲稈や糞害の苦情が出てくるのが予想されるからであります。

しかし御市として今となっては他の場所はどうしても無理ということであれば、次善の策として、このたび見直された計画について、次の点を指摘して要望致します。

このたび見直された少年野球場の建設計画の図面を見ますと

(1) 2面の球場のうち、西側の一面はコロニーのある場所に近く、球場とコロニーとの間に遮蔽や緩衝となる樹木もなくなる状態であれば、営業への影響もあること。

(2) 駐車場もコロニーの近くに造られるので、営業への影響とともに、自動車などへの糞害も生じて苦情が出ること。

などが予想されます。

従って御市が行出された人とサギとの共存を図るという方針のもとに、より効果的な共存策として、当支部は次のように考えます。

即ち、野球場施設を営業地よりもっと離して建設するという前提のもとに

(1) 駐車場として新たに買収する西側の部分をやめて、その分を北にある「減る部分」に隣接して買収し、「減る部分」と合わせて駐車場と野球場の用地とする。そうすれば、西側一面の球場は営業地よりかなり離して建設することができ、営業への影響も少なくなると共に、駐車場から野球場への出入りも便利になると思われる。

(2) もし買収事情や予算との関係で、そのことが無理であれば、むしろ「減る部分」に駐車場を造り、野球場も配置や向きを検討して、西側の球場をできるだけ営業地より離すようにする。

以上の点について、更にご検討下さいませようお静い致します。

なお、営業期を避けて工事を行うのご配慮は誠に結構と存じます。アオサギの営業期(繁殖期)は3月~7月ですので、工事は8月~翌年2月の間に行われますよう、是非お願い致します。

一方、アオサギが水田の淵を踏みつぶすなどの被害があり、周辺住民農家から請願書も出ているとのことですが、こうした被害については客観的に科学的な調査を行って対処すべきものと考えます。

以上

“サギの保護”には困惑していると、4大字の町内会長・農家組合長の連名で、“サギの被害”対策を要望する陳情書を市長宛に出している。市議会でもコロニーの保護に理解を示す議員もいたが、積極的に動いたのはI議員1人だけだった。保護を望む声は、上越教育大の中村教授が日報の「人」欄でコメントしたのと、当支部が要望書を出した他は表面に現われなかった。

ともあれ、今回は当支部として保護問題で初めて要望書を出して空振りには終わったが、保護問題に取り組む1つの体験として、また当支部の存在を社会に示したことで、意義があったと考えたい。今回は対応が遅れたように思うので、今後はいち早く対処して実効が得られるよう体制を整えておく必要がある。

なお、その後上越市は予定地の土地を買収したが、コロニーに隣接している成林したスギの林は、所有者が用材用に伐採してしまい、コロニーの一方が裸にされた格好なので、今年果して営巣するかどうか危ぶまれるところである。

巻機山の鳥類調査中間報告

研究部・保護部

上越国境の名山といわれ、魚沼連峰県立自然公園に含まれている巻機山が、スキー場やリゾート域として開発されようとしているとき、この山域の鳥類についてはまだ本格的な調査がなされていない。そこで当支部として調査をしようということが'89年5月の総会で決定された。調査担当者として4名のメンバーがあげられ、今年度は3回行う予定が立てられ、次のように実行された。(第2回と第3回は天候その他で予定日より遅れた)

第1回(5月28・29日)：山麓の清水集落付近と清水より桜坂を通り、小沢川を越えて駐車場のある登山道入口までの山麓、および登山道の井戸屋根コースの7合目(1570m)付近まで。調査者一柳瀬昭彦・山本明。

第2回(7月14日)：登山道入口から割引沢避難道を登り、割引沢から割引岳頂上→御機屋稜線→ニセ巻機→井戸屋根コースを下り登山道入口まで。調査者一渡辺央・山本。

第3回(10月28・29日)：第1回と同じ。ただし井戸屋根コースは6合目(1350m)付近まで。調査者一柳瀬・山本。

これだけの調査では不十分で、来年度も引き続き行わなければならないが、さし当り今年度の調査結果から出現種を中心に報告する。

5月27・28日—清水集落周辺と登山道入口までの山麓で出現したのは、イカルチドリ・イソシギ・ツツドリ・ブッポウソウ・アオゲラ・ツバメ・イワツバメ・キセキレイ・セグロセキレイ・サンショウクイ・ヒヨドリ・クロツグミ・ヤブサメ・ウグ

イス・エゾムシクイ・オオルリ・ヒガラ・シジュウカラ・メジロ・ホオジロ・ノジコ・カワラヒワ・イカル・スズメ・カケス・ハシブトガラスの26種。中でもブッポウソウは繁殖が推定されるので、来シーズンはそれを確認したいところ。登山道入口から井戸屋根コース7合目までの山地では、オオタカ・アオバト・ジュウイチ・ツツドリ・カッコウ・ホトトギス・アオゲラ・キセキレイ・ビンズイ・ヒヨドリ・ミソサザイ・コマドリ・コルリ・クロツグミ・ヤブサメ・ウグイス・メボソムシクイ・センダイムシクイ・キクイタダキ・キビタキ・オオルリ・コガラ・ヒガラ・シジュウカラ・メジロ・ホオジロ・クロジ・ウソ・カケス・ハシブトガラスの30種が出現した。この中で比較的多かったのは、コルリ・ウグイス・キビタキ・ヒガラ・ホオジロ・カケスなどであった。ここは5合目(1130m)から7合目(1570m)にかけてブナ林があり、その下部はミズナラを主とする広葉樹林のため、こうした樹鳥類が多いのであろう。6合目よ



五合目付近の秋のブナ林('89.10.29)

り上には残雪があり、これから繁殖期に入ろうとする時期であるが、山麓ではすでに繁殖期に入っているこの時期に、合せて42種が出現していることは注目されよう。

7月17日一朝雨のため出発がおくれたが、割引沢避難道・井戸尾根の両コースで出現したのは、ノスリ・キジバト・カッコウ・アオゲラ・コゲラ・ツバメ・キセキレイ・ビンズイ・サンショウクイ・ヒヨドリ・モズ・ミソサザイ・カヤクグリ・コマ

ドリ・クロツグミ・ヤブサメ・ウグイス・メボソムシクイ・センダイムシクイ・キビタキ・オオルリ・コガラ・ヒガラ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・メジロ・ホオジロ・クロジ・カワラヒワ・ウソ・カケス・ホシガラス・ハシブトガラスの33種であった。比較的多かったのは、キセキレイ・ヒヨドリ・ヤブサメ・ウグイス・コガラ・シジュウカラ・メジロ・ホオジロ・ウソなど。モズが標高1700m付近まで上っていたのが珍しかった。

10月28・29日の秋の調査では、5月の調査と同じ山麓で、カルガモ・トビ・ツミ・キジバト・アオゲラ・セグロセキレイ・モズ・カワガラス・ミソサザイ・シロハラ・ツグミ・ウグイス・ノビタキ・コガラ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・ホオジロ・カシラダカ・アオジ・カワラヒワ・スズメ・ハシブトガラスの22種が出現、また井戸尾根登山道コースでは、アカゲラ・コゲラ・ルリビタキ・シロハラ・ツグミ・ウグイス・キクイタダキ・エナガ・コガラ・ヤマガラ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・ウソ・イカル・ハシブトガラスの15種が出現した。両方合せれば28種となる。比較的多かったのは、山麓ではシロハラ・コガラ・ヒガラ・ホオジロ・カシラダカ・カワラヒワ・スズメなど、山地ではシロハラ・ツ



山頂付近の景観（'89.7.14）

グミ・エナガなどであった。

なお来年度は繁殖期に井戸尾根登山道コースと山頂付近、春季（5月上旬頃）に山麓付近を行いたいところである。

〔附記〕巻機山の開発は、目下事業主体の住友不動産で凍結中と言われている。

＜野鳥観察豆辞典＞

図鑑について

“事室は小説より奇なり”と言われるが、“実物は図鑑より異なり”と言えるのではあるまいか。もち論図鑑をつくる人は、できるだけ実物に忠実たらんと努力するのであろうが、やはり人のつくるもので限界がある。形はともかく、微妙な色どりや細部の色分けなど、図鑑が実物通り表現できるものではない。図鑑は標準的なものを示すにすぎず、野外では光線の具合によって色彩も違ってくるし、細部の色分けなど成幼♀♂で段階的に異なるものもある。図鑑はあくまで目やすとして使うもので、特に珍鳥・採鳥・亜種などについては、あまりあてにしない方がよい — とはベテランの観察者や専門家の言である。

行事報告

◇ 第 3 回 研究発表会

'89年12月17日、昨年と同様鳥屋野潟の畔にある県立自然科学館で、9時30分より調査報告・研究発表・スライド発表が行われた。報告・発表者と内容などは次の通り。

(1) 小野島学：県内に生息するセキレイ類の分布について。

県内に生息する3種のセキレイ類について、今年度行った会員からのアンケート調査をまとめて報告された。(最初にアジアに生息するセキレイ類についても紹介)調査はまだ不記分なので今後も継続したいとのこと。

(2) 小池重人：コムクドリの繁殖生態—営巣場所の確保とつがい形成。

巣箱架設によるコムクドリの繁殖生態についての10年余にわたる研究から、副題の部分をスライドを用いて説明され、興味深い繁殖行動を紹介された。(なお小池氏は日本野鳥の会研究報告Strix No.7-1988に、このコムクドリの繁殖生態について、論文としてくわしく報告されている)

(3) 末崎興助：繁殖期のハヤブサの行動。

海岸の繁殖地でハヤブサの行動を撮影したスライドを発表、猛禽ハヤブサのあまり見ることのできない数々の場面を紹介された。

(4) 渡部 通：ブナ林の四季と鳥。

氏がフィールドとしている東蒲室谷の奥に広がる日尊、倉山のブナ林の四季の景観と、そこに生息する鳥特にキバシリの貴重な繁殖の記録など、美しいスライドで紹介された。しかしこのすばらしいブナ林も、年々伐採さ

れて減少してゆくのは身を切られる思いだと強くその保護を訴えられた。

(5) 石部 久：スライド特に二連スライドの作り方について。

氏が作成した鳥屋野潟を中心とした「新潟の自然」の二連スライド(ナレーション吹込みのテープ連動)を映写して、これらの作り方を紹介された。

なお、案内に記載されてあった石井哲夫氏の「バンデングにあらわれた鳥類の移動状況」は、当日ヒシクイ調査日と重なったため、調査員の石井氏はどうしても抜けられなくなったため、石部氏が代役をつとめられた。

◇ 朝日池探鳥会

11月19日、今年は朝からの雨、昨年とはあんなに好い天気にもぐまれたのにと残念至極。それでも遠くは新潟から、そして長岡・柏崎からも多く計25人が集まった。まともな探鳥はできず、柏崎の小林さんのワゴン車に入れてもらって、小林さんと高田の古川さんから、朝日池の鳥についていろいろ伺った。小降りの中に出て、カモ類を主として探鳥しているうち、オジロワシを見つけて今年の初認となったのは収穫であった。

編集後記 そろそろ寒も明けようとしていますが、今冬は平年並の雪、まだ冬の最中です。本報が会員の皆様の元に届く頃は、春もすぐそこまでやってきて、野の鳥たちも繁殖に向って躍動を始めることでしょう。

今年も元気で活動されますよう。(Y)

発行 1990年3月1日 No.29

発行人 大 島 基

事務局 日本野鳥の会新潟県支部

〒950-21 新潟県新潟市五十嵐西15番地38号

電話025-261-1416 石部 久 振替 新潟1-6002